夏期福音特別集会（1）（伊東）

巨蝗とアバドン　軍馬と巻物

――ヨハネ黙示録第８～10章――

１９８４年７月20日
小池辰雄

永遠的な次元の世界　第七の封印　巨大な蝗　額に神の印　破壊者アバドン　小さき巻物　聖書を食い尽くす　全存在を投入していく

【ヨハネ黙示録８】

1 第七の封印を解き給いたれば、凡そ半時のあいだ天静かなりき。2 われ神の前に立てる七人の御使を見たり、彼らは七つのラッパを与えられたり。

3 また他の一人の御使、金の香炉を持ちきたりて祭壇の前に立ち、多くの香を与えられたり。これは凡ての聖徒の祈に加えて御座の前なる金の香壇の上に献げんためなり。4 而して香の煙、御使の手より聖徒たちの祈とともに神の前に上れり。5 御使その香炉をとり之に祭壇の火を盛りて地に投げたれば、数多の雷霆と声と電光と、また地震おこれり。

6 ここに七つのラッパをもてる七人の御使これを吹く備えをなせり。

7 第一の御使ラッパを吹きしに、血の混りたる雹と火とありて、地にふりくだり、地の三分の一焼け失せ、樹の三分の一焼け失せ、もろもろの青草焼け失せたり。

8 第二の御使ラッパを吹きしに、火にて燃ゆる大いなる山の如きもの海に投げ入れられ、海の三分の一血に変じ、9 海の中に造られたるものの三分の一死に、船の三分の一滅びたり。

10 第三の御使ラッパを吹きしに、燈火のごとく燃ゆる大いなる星天より隕ちきたり、川の三分の一と水の源泉との上におちたり。11 この星の名は苦艾という。水の三分の一は苦艾となり、水の苦くなりしに因りて多くの人死にたり。

12 第四の御使ラッパを吹きしに、日の三分の一と月の三分の一と星の三分の一と撃たれて、その三分の一は暗くなり、昼も三分の一は光なく、夜も亦おなじ。

13 また見しに、一つの鷲の中空を飛び、大いなる声して言うを聞けり。曰く『地に住める者どもは禍害なるかな、禍害なるかな、禍害なるかな、尚ほ

かに三人の御使の吹かんとするラッパの声あるに因りてなり』

【ヨハネ黙示録９】

1第五の御使ラッパを吹きしに、われ一つの星の天より地に隕ちたるを見たり。この星は底なき坑の鍵を与えられたり。2斯て底なき坑を開きたれば、大いなる炉の煙のごとき煙、坑より立ちのぼり、日も空も坑の煙にて暗くなれり。3煙の中より蝗地上に出でて、地の蝎のもてる力のごとき力を与えられ、4地の草、すべての青きもの又すべての樹を害うことなく、ただ額に神の印なき人をのみ害うことを命ぜられたり。5然れど彼らを殺すことを許されず、五月のあいだ苦しむることを許さる、その苦痛は蝎に刺されたる苦痛のごとし。6このとき人々、死を求むるとも見出さず、死なんと欲すとも死は逃げ去るべし。7かの蝗の形は戦争の為に具えたる馬のごとく、頭には金に似たる冠冕の如きものあり、顔は人の顔のごとく、8之に女の頭髪のごとき頭髪あり、歯は獅子の歯のごとし。9また鉄の胸当あり、その翼の音は軍車の轟くごとく、多くの馬の戦闘に馳せゆくが如し。10また蝎のごとき尾ありて之に刺あり、この尾に五月のあいだ人を害う力あり。11この蝗に王あり。底なき所の使にして名をヘブル語にてアバドンと云い、ギリシヤ語にてアポルオンと云う。

12第一の禍害すぎ去れり、視よ、此の後なお二つの禍害きたらん。

13第六の御使ラッパを吹きしに、神の前なる金の香壇の四つの角より声ありて、14ラッパを持てる第六の御使に『大いなるユウフラテ川の辺に繋がれおる四人の御使を解き放て』と言うを聞けり。15斯てその時、その日、その月、その年に至りて、人の三分の一を殺さん為に備えられたる四人の御使は、解き放たれたり。16騎兵の数は二億なり、我その数を聞けり。17われ幻影にてその馬と之に乗る者とを見しに、彼らは火・煙・硫黄の色したる胸当を著く。馬の頭は獅子の頭のごとくにて、その口よりは火と煙と硫黄と出づ。18この三つの苦痛、すなわち其の口より出ずる火と煙と硫黄とに因りて人の三分の一殺されたり。19馬の力はその口とその尾とにあり、その尾は蛇の如くにして頭あり、之をもて人を害うなり。20これらの苦痛にて殺されざりし残りの人々は、おのが手の業を悔改めずして、なお悪鬼を拝し、見ること、聞くこと、歩むこと能わぬ金・銀・銅・石・木の偶像を拝せり。21又その人殺・呪術・淫行・窃盗を悔改めざりき。

【ヨハネ黙示録10】

1我また一人の強き御使の雲を著て天より降るを見たり。その頭の上に虹あり、その顔は日の如く、その足は火の柱のごとし。2その手には展きたる

小さき巻物をもち、右の足を海の上におき、左の足を地の上におき、3獅子の吼(ほ)ゆる如く大声に呼(よば)われり、呼わりたるとき七つの雷霆(いかずち)おのおの声を出せり。4七つの雷霆の語りし時、われ書き記さんとせしに、天より声ありて『七つの雷霆の語りしことは封じて書き記すな』というを聞けり。5斯て我が見しところの海と地とに跨(またが)り立てる御使は、天にむかいて右の手を挙げ、6天および其の中に在るもの、地および其の中にあるもの、海および其の中にある物を造り給いし世々限りなく生きたもう者を指し、誓いて言う『この後、時は延ぶることなし。7第七の御使の吹かんとするラッパの声の出ずる時に至りて、神の僕なる預言者たちに示し給いし如く、その奥義は成就せらるべし』8斯て我が前(さき)に天より聞きし声のまた我に語りて『なんじ往きて海と地とに跨(またが)り立てる御使の手にある展(ひら)きたる巻物を取れ』と言うを聞けり。9われ御使のもとに往きて小さき巻物を我に与えんことを請いたれば、彼いう『これを取りて食(くら)い尽せ、さらば汝の腹苦(にが)くならん、然れど其の口には蜜のごとく甘からん』10われ御使の手より小さき巻物をとりて食(くら)い尽したれば、口には蜜のごとく甘かりしが、食いし後わが腹は苦くなれり。11また或者われに言う『なんじ再び多くの民・国・国語・王たちに就きて預言すべし』

●永遠的な次元の世界

我々の集会は決して「聖書研究会」ではない。聖書を身体で受けとる会です。それでなければ、何年聖書を読んでも、どうにもならん。そういう気合でやっていく。今、いろいろな情況に皆さんは居られると思うし、いろいろな情況で来れなかった人もあるし、そういう相対的な事はどうでもいい。それを突破して、我々は永遠的な次元の世界に入る。聖書はこれを与えようとしている書でありますので、いろいろな事にでっくわせばでっくわすほど、不如意になればなるほど、逆に力がくる。それが本当の信仰の世界です。地上の禍福、吉凶、そんなことはどうでもいい。どうぞ、そういう意味で、必ず突破してください。

黙示録第8章に入ります。

1第七の封印を解き給いたれば、

七つの封印の書で、今度は第七番目の一番大事なところです。「七」という数は天的な数で、一、三、七、十二という数は聖書では大事な数です。

凡そ半時のあいだ天静かなりき。

たった一行ですが、非常に深遠な内容です。天静という。詩篇の19篇に、

「語らずいわずその声きこえざるに、そのひびきは全地にあまねく、そのことばは地のはてにまでおよぶ。神はかしこに帷幄(あげばり)を日のためにもうけたまえり。」
（詩篇19・3～4）

驚くべき言葉ですね。

「**語らずいわずその声がきこえない。**

それなのに、

そのひびきは全地にあまねく、そのことばは地のはてにまでおよぶ」

とある。「響き」が言葉なんです。聖書は意味の本ではない。響きの本、音楽なんです。

「音楽は世界語である」

という。なるほど、聖書はヘブライ語、ギリシア語で書かれています。日本語、ドイツ語、英語、フランス語、漢文の聖書と、いろいろな訳があります。けれども、意味の奥のこの響きが本当に受けとれないと、意味の内実が本当は受けとれてない。

しかも、これは天の静けさという、沈黙の世界です。

「沈黙は金にして、雄弁は銀なり」

なんていう。

「闇の夜に鳴かぬ烏（からす）の声きけば生れぬ先の父をしぞ思う」

という。これは白隠の歌です。闇の夜に鳴かぬ烏の声を聞く、生まれぬ先の父が恋しい、という。以心伝心ということ。心から心へ通ずる。目は口よりも言うという。響きも、響きのない世界で響きを聞く。ところが、

「これはどういう意味だ、ああだこうだ」

と、そんな詮索ばかりやっているのが聖書研究なんだ。ご苦労さんなはなしですよ。我々はそんな読み方をしない。

私はキリスト教界で全く誤解されています。響きの世界で、『無の神学』なんてやっているものだから。正直、誰も書評を書けない。私がどうかではない、キリストがそうだから仕方がない。それを私は告白しているだけですから。私はとにかく、キリストに直結して、キリストの直弟子の次元に――ペテロ、パウロ、ヨハネ、ヤコブ――この次元にいかないではやまないという気魄でやっているわけです。

響きも、響きなき響きを、無声の声を聞く。

「声前一言、千聖不伝」

という。声の前の一言は千の聖（ひじり）もこれを伝えることができないという。けれども、その千聖不伝の声前の一言をキリストは聞いておられる。詩篇139編の、

「**汝知りたもう**」

です。それは本当に素晴らしい世界です。響きの意味はその時に皆さん一人ひとりに与えられる。昨日の意味と今日の意味は違う。それが本当の聖書なんです。聖書は無限の意味を持っている。

「聖書はかく解釈しなければならない」

なんて、そんなものではない。私は日本の一流の坊さんの言っていることや書いているこ

とやしていることに非常に興味を持つ。彼らは仏道の世界でそういう次元にいるから。いい加減な聖書の註解書なんて要らん。

●第七の封印

1**第七の封印を解き給いたれば、凡そ半時のあいだ天静かなりき。**

という。

「この静けさの響きを聞け」

というんです。これは全身でキリストの中に祈り入る、帰入する。耳で聞くのではなくて全存在で聞く。そして、その静けさの中にどんな響きがあるかということが段々展開してくるわけです。黙って祈り込んで――沈黙の祈りが一番深い――そして、バーッと爆発する。その爆発は自分が爆発するのではない。上からの力が爆発させる。

2**われ神の前に立てる七人の御使を見たり、彼らは七つのラッパを与えられたり。**

「ラッパ」というのは非常にそういう意味で大事な音信です。「七人の御使」というのは、「ウリエル、ラファエル、ラブエル、ミカエル、サリエル、ガブリエル、レミエル」という名前です。この七人の御使の名前はみな「～エル」となっている。「エール」というのは「力あるもの」という意味で神さまのことです。「インマヌエール」とは「神我らと共に」というヘブライ語です。

3**また他の一人の御使、金の香炉（こうろ）を持ちきたりて祭壇の前に立ち、多くの香を与えられたり。これは凡ての聖徒の祈りに加えて御座（みくら）の前なる金の香壇の上に献げんためなり。**

祈りがまた「香」でもあるし、相応じているようなわけです。「聖徒の祈り」のことは6章にも書いてあります。

4**而して香の煙、御使の手より聖徒たちの祈りとともに神の前に上（のぼ）れり。**5**御使その香炉をとり之に祭壇の火を盛りて地に投げたれば、数多（あまた）の雷霆（いかづち）と声と電光（いなづま）と、また地震おこれり。**

エライ事になりました。雷霆、電光、声、地震、これはみな審判の始まるところの恐ろしい合図です。

6**ここに七つのラッパをもてる七人の御使これを吹く備えをなせり。**

7**第一の御使ラッパを吹きしに、血の混りたる雹（ひょう）と火とありて、地にふりくだり、地の三分の一焼け失せ、樹の三分の一焼け失せ、もろもろの青草焼け失せたり。**

出エジプト記9章に似たような現象がありました。それと相応ずるところです。「火」のことは出エジプト記7章に出ている。モーセが不思議なことをいろいろやった、あのところ

です。「三分の一」とはただ数学的な「三分の一」ではない。大体、三分の一やっつけられると、これはもう非常な危機なんです。人間も血の三分の一がなくなったら、死ぬでしょ。そういう恐ろしいことです。

8 **第二の御使ラッパを吹きしに、火にて燃ゆる大いなる山の如きもの海に投げ入れられ、海の三分の一血に変じ、**

もちろんこれはみな霊的な啓示です。

9 **海の中に造られたるものの三分の一死に、船の三分の一滅びたり。**

旧約聖書にエノキ書という非常に面白い外典（げてん）がありますが、そこにはこういういろいろな不思議なことも書いてあります。黙示文学です。

10 **第三の御使ラッパを吹きしに、燈火（ともしび）のごとく燃ゆる大いなる星天より隕（お）ちきたり、川の三分の一と水のとの上におちたり。**11 **この星の名は苦艾（にがよもぎ）という。**

「苦艾（にがよもぎ）」は「いんちん」とも言う。このことはエレミヤ記9章に出ている。これは神の懲らしめを表していると学者は言いますが、多分そうでしょう。

水の三分の一は苦艾（にがよもぎ）となり、水の苦くなりしに因りて多くの人死にたり。

12 **第四の御使ラッパを吹きしに、日の三分の一と月の三分の一と星の三分の一と撃たれて、その三分の一は暗くなり、昼も三分の一は光なく、夜も亦おなじ。**

13 **また見しに、一つの鷲の中空（なかぞら）を飛び、大いなる声して言うを聞けり。曰く『地に住める者どもは禍害（わざわい）なるかな、禍害なるかな、禍害なるかな、尚ほかに三人の御使の吹かんとするラッパの声あるに因りてなり』**

一、二、三、四と来たでしょ。それから、今度はまた三人がくるという。四、三とくる。大体、最初に自然界がやられ、その次に人間界がやられる。それで、禍害（わざわい）なるかなということになる。自然界がやられ、人間界がやられていくもとは、実は人間界が、やられるもとなんです。今の世界を見れば、よく分かる。自然界を悪くしているのは実は人間界が悪くなっているからです。公害現象がはっきり表している。

アマゾン流域の森林の四分の一がもう伐採されたそうだ。そうすると、世界の酸素に影響して、天候に非常に狂いがきているという。みなそうです。アメリカの女預言者やノストラダムスが言っているとおり、21世紀は無事にはきそうもないですね。いろいろな事が行き詰まる。そうすると、やけくそになって、もの凄い戦争になったらお終いだ。何のかんのと条約を結んだって、蔭では一生懸命でその先その先と恐ろしい武器を考えている。本当に救い難きは人の世です。理性なんかでどうにもならん。理性で分かっていても、これはどうにもならない。だから、ここに

「禍害（わざわい）なるかな、禍害なるかな、禍害なるかな」

と書いてある。キリストがマタイ伝23章で七度、

「**禍害**なるかな」

を語っておられますが、全くその通りです。

●巨大な蝗

黙示録９章に入ります。

1**第五の御使ラッパを吹きしに、われ一つの星の天より地に隕ちたるを見たり。この星は底なき坑の鍵を与えられたり。**

「天から落ちた星」とはサタンのことです。優れた天使が「我も神の如く」といって傲慢になった。霊的な傲慢は一番悪い。サタンは傲慢の霊ですから、これは落とされる。

「**暁の星いかにして天より落ちしや**」

という、あの場合の「暁の星」というのは黙示録の終りのとは違う。「底なき坑」とは陰府のことです。これはルカ伝10章18節に書いてある。ローマ書10章７節にも陰府のことが出ている。旧約聖書ではよく「淵」「深淵」という言い方をしている。

2**斯て底なき坑を開きたれば、大いなる炉の煙のごとき煙、坑より立ちのぼり、日も空も坑の煙にて暗くなれり。3煙の中より蝗地上に出でて、地の蝎のもてる力のごとき力を与えられ、4地の草、すべての青きもの又すべての樹を害うことなく、ただ額に神の印なき人をのみ害うことを命ぜられたり。**

とある。それで「禍害なるかな、禍害なるかな、禍害なるかな」ときたんです。ここからは、自然界ではなくて、人間界にきてしまった。巨大な蝗です。ヨエル書１章に、

「**噬くらう蝗虫の遺せる者は群いる蝗虫のくらう所となり、その遺せる者はなめつくすおおねむしのくらう所となり、その遺せる者は喫ほろぼす蝗虫の食う所となれり。**」（ヨエル1・4）

とある。この「蝗虫」はもちろん、サタン的勢力の大国、今でいうと勢力のある大国のことです。ペルシャとか、アッシリヤとか、バビロニヤとかを「蝗虫」という。黙示文学はそういう譬えでものを言う。また、

「**然どエホバ言いたもう、今にても汝ら断食と哀哭と悲哀とをなし、心をつくして我に帰れ。**

「**心をつくして全身でもって我に帰れ**」

という。「心をつくし」とはヘブライ語で「すべての心」と書いてある。

「全身でもって私に帰ってこい」

ということ。

汝ら衣を裂かずして心を裂き、汝等の神エホバに帰るべし。彼は恩恵あり憐憫あり、かつ怒ることゆるく愛憐大いにして災害をなすを悔いたもうなり。

「神さまはお前たちが本当に帰ってくれば、災いをしようと思ったのを悔いなさる

ぞ」

と。

誰か彼のあるいは立帰り悔いて祝福（めぐみ）をその後にとめのこし汝らをして素祭と灌祭とをなんじらの神エホバにささげしめたまわじと知らんや。」（ヨエル２・12～14）

「立ち帰れ、立ち帰れ」

と言っている。これが「悔改」という言葉の本当の意味です。ただ心で悔改めるということではない。

「全存在で立ち帰りなさい」

ということです。今のキリスト教が頭やただ心の世界になっているからダメなんです、全存在的でないから。預言者は一体何を言ったかというと、結局、預言者はみな

「立ち帰れ」

ということを言っている。

「神さまの中に帰り入れ、祈入せよ」

と。祈り入ったり、帰り入ったりする。要するに、この世界の中に入らなければダメなんです、外側ではダメなんだ。

「われキリストの中に、キリストわがうちに」

と、パウロが散々言っているでしょ。形容詞で言っているのではない。本当にその世界に居るのだから。

●額に神の印

4 地の草、すべての青きもの又すべての樹を害（そこな）うことなく、ただ額に神の印なき人をのみ害うことを命ぜられたり。

どうするんですか、我々は「神の印」を額に書けますか。神さまは、人間が書いたって、そんなものはダメなんだ。これは無印の印、印無き印です。

「あの人の額にはキリストの名が記されてある」

と、その人の実存を見ていれば分かる。実存というものは、外側の立派なんていうものではない。

「あの人は立派だからどうだこうだ」

なんて、そんな言い方はダメだ。

「全存在でキリストととりくんでいるか」

ということ。躓いても転んでもいいんだ、その人は本当にキリストととっくんでいるか。人間的に立派なんていうものはダメなんだ。悪くはないけれども、次元が違う。破れ器の中に神の光が光るんです。

「**義人なし、一人だになし**」
「**我は罪びとの首(かしら)なり**」
とパウロが言った。そのパウロがどれだけの驚くべき実存であったか。始めはパリサイで傲慢だった。けれども、熱心だった。
「しかし、お前の熱心は大間違いだ」
と、キリストにダマスコ途上でひっくり返された。
「**わが目より鱗(うろこ)の如きもの落ちたり。今までの自分の義なんていうものは塵芥(ちりあくた)の如く思う**」
とパウロは言った。イザヤ書の中にも
「我々の義なんていうものはゴミみたいなものだ」
とある。
これは無印の印です。その無印の印はどんな見えざる姿をしてるかというと、私に言わせると、
「十字架・聖霊」（〇の中に十の印）
の姿です。これが無印の印です。私から十字架と聖霊を取ったら、もう全然ダメだよ。これは何ものにも代えられない。だから、私は「無者」と言っている。
「キリストの無者である」
ということは
「十字架と聖霊の他は何もない」
ということ。あれども無きが如しということです。こういう乱暴な「無者」という言い方をするものだから、誰にも分からん。それは分からんさ、自分で本当にそこまで追い詰められて体験しないと。キリストは自分を無者となさったけれども、私は真似はできないから、キリストの十字架でもって我無き世界をたまわり、無限無量の聖霊の世界をたまわったんだ。どっちも絶対恩寵の世界です…（異言）…。あなた方、全身がたぎりませんか。
その印は神・キリストだけがご覧になる。人間には見えない。
「あの人はどうだろう、こうだろう?」
なんて、ひとのことではない。

●破壊者アバドン

5 **然れど彼らを殺すことを許されず、五月(いつつき)のあいだ苦しむることを許さる、**
その苦痛(くるしみ)は蝎(さそり)に刺されたる苦痛のごとし。
恐いよ、「殺すことを許されず」だから。
6 **このとき人々、死を求むるとも見出さず、死なんと欲すとも死は逃げ去るべし。**

と、驚くべきことが書いてある。死ぬに死なれず、自殺もできない。安楽死しようとしたってできない。凄いね、そんなことになるぞと。法然あたりが見せられた地獄の苦しみもそういうところがある。

7かの蝗の形は戦争の為に具えたる馬のごとく、頭には金に似たる冠冕の如きものあり、顔は人の顔のごとく、8之に女の頭髪のごとき頭髪あり、歯は獅子の歯のごとし。9また鉄の胸当あり、その翼の音は軍車の轟くごとく、多くの馬の戦闘に馳せゆくが如し。10また蝎のごとき尾ありて之に刺あり、この尾に五月のあいだ人を害う力あり。

「五」「六」という数はよくないんだ。

11この蝗に王あり。底なき所の使にして名をヘブル語にてアバドンと云い、ギリシヤ語にてアポルオンと云う。

この「王」とはサタンです。「アバドン」も「アポルオン」も破壊、破壊者という意味です。ゲーテの『ファウスト』の1334行に、

「お前の名前が蠅の神、破壊者、嘘つき者と言われるときに、お前の本質がよくわかる」

と書いてある。これはファウストの相手の「メフィストフェレス」のことで、サタンの使者みたいなやつです。これはヘブライ語の「メフィストーファル」という字からきたという解釈が私は一番いいと思いますが、「メフィストーファル」というのは

「破壊者、嘘つき」

という意味です。破壊者は人殺しと同じことになるので、キリストがヨハネ伝8章44節で仰っていることと同じです。

42「イエス言いたもう『神もし汝らの父ならば、汝ら我を愛せん、われ神より出でて来ればなり。

「私は神さまからやって来たから、もし神さまがお前たちの父ならば、私を愛するはずなんだけれども、なぜ私を殺そうとするか」

というわけです。

我は己より来るにあらず、神われを遣し給えり。43何故わが語ることを悟らぬか、是わが言をきくこと能わぬに因る。44汝らは己が父、悪魔より出でて己が父の慾を行わんことを望む。彼は最初より人殺しなり、また真その中になき故に真に立たず、彼は虚偽をかたる毎に己より語る、それは虚偽者にして虚偽の父なればなり。」（ヨハネ8・42～44）

人殺しであり、虚偽者である。破壊者である。お前たちは「メフィストフェレス」だというわけだ。自分はアブラハムより先にきているんだと、

「イエス言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、アブラハムの生まれいでぬ前より我は在るなり』」（ヨハネ8・58）

とキリストが仰っているでしょ。もぅ、てんで次元が違う。だから、

「聖書は意味ではありません、その現実に入りなさい」

と言う。「アバドン」とか「アポルオン」とは蝗の王様で、要するにサタンのことです。嘘つきなんだ。

中国の話で、宋のチンジョウという人がいた。裁判官みたいな人です。ある日、ものを失った者があって、その裁判官に届けだした。嫌疑者が数人あらわれた。すると、このチンジョウが言うのに、

「或る寺の鐘は盗みをした者をよく判別する。盗んだ者がその鐘に手を触れると、鐘がゴーンと音をだす」

と。そう聞かせて、嫌疑者たちに暗がりでその鐘に手を触れさせた。ところが、誰が触れても鐘が鳴らない。鐘を明るみに出したら、鐘に炭が塗ってある。鳴らないのだけれども、ちゃんと触れている。手に炭がついている。ところが、一人の手には炭がついていない。それは、触れるとゴーンと音がすると思って触れなかった。

「お前は触れなかった。お前が盗んだのだ。私は盗んでいないと嘘をついた」

と。盗んだという事と嘘をついたという事が二重にそこで分かってしまった。「触れた」と言いながら、実は手に炭が付いてない。「触れた」と言ったのは偽りなんだ。偽りであると同時にこれが盗人である。嘘は盗みの始めだと言うけれども、大岡裁判みたいな面白いお話です。

その先へいきます。

12第一の禍害(わざわい)すぎ去れり、視よ、此の後なお二つの禍害(わざわい)きたらん。

13第六の御使ラッパを吹きしに、神の前なる金の香壇の四つの角(つの)より声ありて、14ラッパを持てる第六の御使に『大いなるユウフラテ川の辺(ほとり)に繋(つな)がれおる四人の御使を解き放て』と言うを聞けり。15斯てその時、その日、その月、その年に至りて、人の三分の一を殺さん為に備えられたる四人の御使は、解き放たれたり。16騎兵の数は二億なり、我その数を聞けり。17われ幻影(まぼろし)にてその馬と之に乗る者とを見しに、彼らは火・煙・硫黄の色したる胸当を著く。馬の頭は獅子の頭のごとくにて、その口よりは火と煙と硫黄と出づ。18この三つの苦痛、すなわち其の口より出ずる火と煙と硫黄とに因りて人の三分の一殺されたり。19馬の力はその口とその尾とにあり、その尾は蛇の如くにして頭あり、之をもて人を害(そこな)うなり。20これらの苦痛にて殺されざりし残の人々は、おのが手の業を悔改めずして、なお悪鬼を拝し、見ること、聞くこと、歩むこと能わぬ金・銀・銅・石・木の偶像を拝せり。21又その人殺・呪術(まじわざ)・淫行・窃盗(ぬすみ)を悔改めざりき。

どうにもならない。三分の一が殺されて、しかもなお悔改めないから、これは全部滅び

にいってしまう。けれども、神さまはまだ本当の最後の手はくださないでいる。

●小さき巻物

今度は黙示録第10章です。

1我また一人の強き御使の雲を著て天より降るを見たり。その頭の上に虹あり、その顔は日の如く、その足は火の柱のごとし。

これは素晴らしい輝きの光景です。虹がある。雲は単なる雲でなく、霊雲です。

2その手には展きたる小さき巻物をもち、右の足を海の上におき、左の足を地の上におき、3獅子の吼ゆる如く大声に呼われり、呼わりたるとき七つの雷霆おのおの声を出せり。4七つの雷霆の語りし時、われ書き記さんとせしに、天より声ありて『七つの雷霆の語りしことは封じて書き記すな』というを聞けり。5斯て我が見しところの海と地とに跨り立てる御使は、天にむかいて右の手を挙げ、6天および其の中に在るもの、地および其の中にあるもの、海および其の中にある物を造り給いし世々限りなく生きたもう者を指し、誓いて言う『この後、時は延ぶることなし。7第七の御使の吹かんとするラッパの声の出ずる時に至りて、神の僕なる預言者たちに示し給いし如く、その奥義は成就せらるべし』

第七の御使がラッパを吹いたら、これが最後の成就の時だと。これは非常に大変な瞬間であります。黙示録10章のところは非常に素晴らしいところです。

8斯て我が前に天より聞きし声のまた我に語りて『なんじ往きて海と地とに跨り立てる御使の手にある展きたる巻物を取れ』と言うを聞けり。

これは大変だ、ヨハネ自身がその現実の中に入ってしまいますから。

9われ御使のもとに往きて小き巻物を我に与えんことを請いたれば、彼いう『これを取りて食い尽せ、さらば汝の腹苦くならん、然れど其の口には蜜のごとく甘からん』10われ御使の手より小き巻物をとりて食い尽したれば、口には蜜のごとく甘かりしが、食いし後わが腹は苦くなれり。11また或者われに言う『なんじ再び多くの民・国・国語・王たちに就きて預言すべし』

開いた巻物を食い尽くしたら、それは非常に甘かったけれども、腹には苦いという。これは非常に深遠な内容です。

●聖書を食い尽くす

我々にとっては、これは聖書のことです。なにもこれはヨハネに言っているのではない。我々に言っている。

「あなた方、聖書を食いなさい。食い尽くしなさい」

と。聖書を食い尽くした人がいるかな。

「**我が肉を食え、我が血を飲め**」

とキリストは言われた。

「**聖書はわれにつきて証するものなり**」

と言われた。聖書を食い尽くすことは、キリストを食うことと同じことになる。全聖書はキリストの証なんです。

日蓮は「身読」と言った。佐渡に流される前に弟子に、

「多くの者は法華経を頭で読んでいる。心で読んでいる者は少ないが、お前は身(からだ)で読め」

と言った。さすがは日蓮です。だから、日蓮が

「南無妙法蓮華経！」

と言えば、本当に波が鎮まる。あれだけの坊さんには、私は頭が下がる。ああいう連中は文字通り生命賭けだ。法難にあって喜ぶような人だから。今のキリスト教なんていうものは間がのびているよ。

聖書を本当に食べるような読み方をしなければダメです。

「私はこの文字は食べました」

と。それは、その文字を読んで、そこから響いてくる、この

「**わが言は霊なり生命なり**」

が身体に入ってきたときに、初めて聖書を食っていることになる。聖書には形容詞はない。文法的な形容詞のことを私は言っているのではない。聖書には形容された言葉なんかないんだ。もっと凄い現実だ。言いきれないで困って呻き叫んでいる。

聖霊が私をして斯く言わせているんだから、しょうがないではないですか。もぅ、たまらんです、聖書というのは、ことに福音書は。青年諸君は福音書を破りとってポケットに入れて、電車の中でも便所でもどこででも読め。それくらいの気魄がないとダメだ。

「**神のためには狂えるなり**」

というところを一遍通らなければダメです。

だから、私はこの10章のところを読んで、たまらなくなった。

「食い尽くせ」

と、私たちに言われている。

「聖書を本当に食べ尽くせ。キリストの生命がくるぞ。意味がどうだこうだではない。言葉が発っしているその奥の現実に自分を投げ入れろ」

ということです。

●全存在を投入していく

キリストがガリラヤ湖上を渉ってきて、舟の中のペテロに、

「来たれ」

と言ったら、ペテロは本当に、

「はいっ」

と言って行った。二、三歩、歩けたんだよ、ペテロは。そうしたら、風と波とを見て懼れたので沈みかかった。

「あれは非常に大事なところだ。これが本当の信仰だ」

とゲーテが言っている。ゲーテという人は聖書の註解書なんか書かないけれども、本当に聖書を読んで消化している。だから、あのもの凄い文学が展開した。

私の涙や、私の怒りや、私の中に入っているもの凄い讃美は、普通の人には分からんです。だから、私は誤解される。私ではないんだ、それは。上からくる響きだから、上からくる涙だから、上からくる歓喜だから。しかし、私は何とかしてこれを表現したいから、これから十何年かかって一つの詩を書きます。ゲーテ、ダンテ級の詩を書きます。全く冗談じゃないよ、これだけの福音を賜って何も表現しなかったら。

皆さんも、それぞれ天下一品ですから、人にどう思われようといいよ、本当にキリストが「そうだ」という生き方をしてください。結婚に破れたって、入学試験に破れたって、恋愛に破れたって、何だっていいよ、そんなことは。もう一つ先の世界の本当の世界に入ってごらん。本当の勝利がくるから。

江戸時代中期の儒者に荻生徂徠（1666～1728）というのがいた。これは伊藤仁斎（1627～1705）に教わったが、なかなか始めはうまくない。そうしたらお母さんが、

「学もし成らずんば生きて帰るべからず」

と言った。ところが、ダメなんだ。荻生徂徠というのは、志が高いところを望んでいたからだろうね。とうとう、川に投身してしまった。ところが、川から救われた。そして、伊藤仁斎が懇ろに諫めて、

「水に身を投げるだけの勇気があるなら、心を書物の中に投げ込め。必ず学は成るぞ」

と言った。それで、彼はその角度で本当に全身を本の中に投げ込んで学んだら、もの凄い学者になった。

「心を本の中に投げ込め」

という、この気合は、私たちには、ヨハネが御使に言われた

「聖書を食らい尽くせ」

ということです。マタイ伝ならマタイ伝を食らい尽くしてごらんなさい。ヨハネ伝ならヨハネ伝を。一つのものを本当に食らい尽くせば、全聖書を食らい尽くした質が出てくる。

量ではないんだ、質の問題だ。それを「食らい尽くす」という。

あなた方の仕事に対しても、全存在を投入していくことです。だから、今の学校の教育は大間違いだ、何科目の平均点が何点だの、偏差値が何点だのとばかり言って。私は中学・高校の校長をやっていたとき、先生方にこう言った。

「とにかく、この生徒はこういう特色があると思ったら、それを伸ばしてやってくれ。その科目については絶対に優をとるだけの気魄を与えてくれ。試験問題は、基本的な問題と中間のと難しいのと三段構えで出して、基本的な問題ができたら、それで落第点はやるな、生徒にちゃんと自信をつけさせるために。人間にはいろいろの得手不得手がある。けれども、これだけはいくら不得手でも知っていなければいかんというのを必ず出せ。普段からそれをちゃんとラインを引かせておけ。それぞれの特色をみなが発揮するようにしなさい」

と。平均点ではないんだ。極端に言えば、

「数学は零点でも、英語は百点とれ」

というわけだ。そういう言い方はしませんでしたけれども。

私たちは、御使から

「聖書を食らいつくせ」

と言われたように――福音書でもイザヤ書でも詩篇でも何でもいい、聖書66巻のうちどれか一つでもいい――それを本当に食らい尽くしたら、あとは楽に食えるようになる。やりなさいよ、本当に。

「先生は、またあんなことを言っているな」

なんて、あんな事ではない、本当なんだ。とにかく、みな自分で実践しないことには身につかない。バカにならなければ。私みたいにバカになる。みな利口すぎる。私は幼子（おさなご）の如くバカなんだ。だから、天国にキリストが入れてくださるかも知れない。天国の所で

「ちょっと待て！」

と言われるかも知れないよ。お待ちします。

皆さんは、本当に福音の証者にならなかったら、福音を生きなかったら、しょうがないですよね。

「分かった、分からない」

なんてなことではないんだ。